

李朝様式複合家具デザインノート

デザイン学科

車 政 弘

Design Note for Complexed I-cho style Furniture

Masahiro KURUMA

1. 動機の所在

現在も李朝家具についての研究は継続中である。李朝家具について考えるようになったのは、1983年に韓国見学旅行を駆け足でして以来である。その後、1984年に内地研修の機会が与えられ、大阪の国立民族学博物館で6ヶ月研究することになった。ここでは約3ヶ月間、毎日収蔵庫で韓国の家具を片っ端から実測することになった。実測の持つ意味を正確に考えていたわけではなかったが、時間をかけて実測調査をすることによって、作る人間の考え方が見えて来るようになることに気が付き始めた。収蔵庫の片隅で空拭き用のタオルとメジャーと懐中電灯を持ってタンスの中に首を突っ込み、内部から接合法の決め手の部分を捜さなければならない。また、どの部分はどういう樹種が使われているのかも重要な調査のポイントとなる。このような方法を採用すると古いものであるのか新しいものであるのか、リメイクしたものであるのか、おおよそ検討もつくようになる。作り手が慎重に精度を高く加工する部分と、すっと気を抜き加工する部分とが分かるようになる。もちろん、だからといって家具の編年までがこうしたことで分かるわけではない。しかし、多くの家具がどの時代の類型であるのか考えるためにも、より精度の高い実測調査が多くなされるべきだと思う。実際、過去の家具に関してはきわめて大ざっぱな事しか分からないことが多いのである。

このようにして実測した中から、収納家具についてはその結果を「国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具—その技術とデザイン—」¹⁾として発

表した。

収納家具のプロポーションと各部ディテール、接合法、使用樹種、塗装仕上げ、装飾文様について考察してみたのだが、同時にこのような視点を考慮しつつ、自らもデザインの対象として、李朝様式を取り上げてみたいと思うようになっていた。

2. デザインの概要

収納家具が発展するには、当然その中に入れるものの内容や量が条件となる。また、その時代、イエの制度、価値観がどのようなものであるのかによっても違ってくる。あるいはその社会の階層性によっても違いがある。従って、様式を引用しながら現代の収納容量の要求に答えるのは、おのずと限界があることである。従って、この点を設計する側と使用する側で事前に了解することが不可欠である。

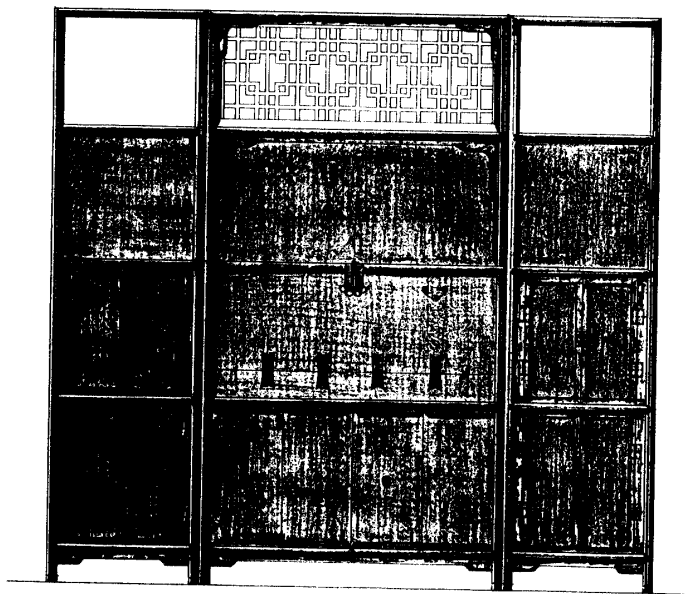
李朝家具の場合、婚礼時に用意されるものと、親子の関係で譲渡されていく種類の家具とがある。当初、この2つの系統のどちらにするかは使用者の価値観であると考え、2案作成し、希望を聞き、最終的にはA案で製作を進めることにした。

A案は親から子へと譲り渡していく家具の系統に属する。

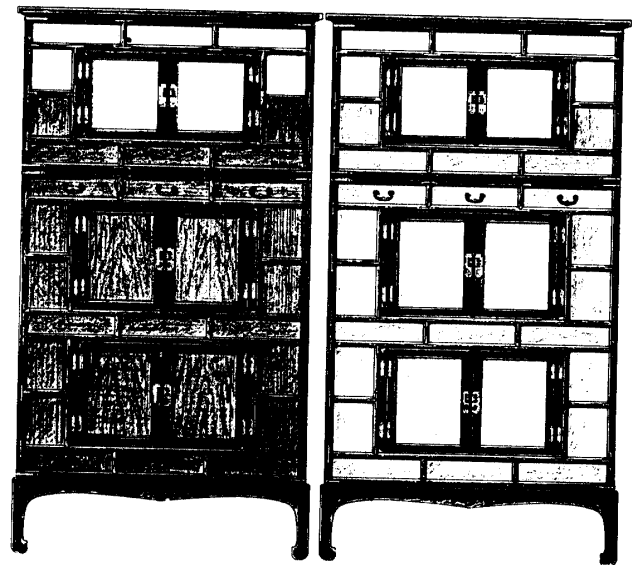
全体を構成する要素は、飾り棚=四方卓子(サバンタクジャ)一対、文房具入れ兼飾り棚=文匣(ムンガップ)+半簞笥=(バンダジ)、本棚=冊卓子(チェクタクジャ)である。

これらの家具について若干述べておきたいと思う²⁾³⁾。

A 飾り棚、書類棚である「四方卓子」は主人の



四方卓子 上段 冊卓子
 中段 バンダジ
 下段 文匣



三層櫥

図1 A案

B案

部屋、舎廊房（サランバン）や女主人の部屋、内房（アンバン）に置かれるきわめて簡素な家具である。「文匣」とともに主室の主要な家具で、軽快な美しさを見せているのが「卓子」類である。幅、奥行き40～80 cmの方形四柱で、高さは150～180 cm。下部は大部分「櫥」（ジャン）になっている（下部に両開き扉のつくものや引出しのつくもの）。あるいは中段に引出しや両開き扉のつくものもある。

上には2、3段の棚板があり書籍、花瓶、香炉、茶器等を載せる書斎の必需品である。通常1対として配置される。「単卓子」は18～19世紀「文匣」が発展して生まれた様式で、李朝後期にその名がつけられたと見られる。柱材としてはカリンが、棚板（層板）にはキリが使われる。「四方卓子」は棚の平面形が正方形のものを指し、棚の平面形が長方形のものは「長卓子」と呼ばれる。「冊卓子」は「長卓子」の1種で、書籍を立てるためのものである。

各部材が細く、黒っぽい仕上げであるため、白い紙張りの壁の前で強いコントラストとなる。

卓子という名称の中で「饌卓子」だけは饌房と大庁の隅に置いて使われた食器棚であり2、3層に

なっていて、棚板は長い長方形で、柱、棚板ともにぶあつく、マツやチョウセンゴヨウが使われる。B 「文匣」（ムンガッ）は小型の文房具や器物を収蔵して、玩賞品を飾る台の役割もかねる家具で、書斎、舎廊房の必需品である。内房用の「文匣」は螺鈿、紫檀が多く、装飾金具は白銅、黄銅である。

「唐文匣」は紫檀でできた小型の「文匣」で、扉に密花珊瑚、翡翠、玉を精巧に彫刻し、一部の層だけが使う高級品である。この「唐文匣」という言い方はわが国で高級な紫檀などを使った家具を「唐木家具」というのに似ている。

「単文匣」は独立して使われるもので、これに対し「双文匣」は対として配置されるものをいう。この「双文匣」の両わきに「四方卓子」が置かれる舎廊房のしつらいは端然としたものである。この他、主として本を入れる「冊文匣」がある。高さが多様で、引出しや両開き扉があり、装飾金具が比較的多くついているものを「乱文匣」と呼ぶ。

「冊文匣」でも「螺鈿文匣」「黒柿文匣」「樺榴文匣」というようにその使われている樹種や仕上げによる呼称もある。また、黒漆塗のものは「倭文

匣」という。

C 「バンダジ」はあえて日本語にすれば半篋筒というようなもので、かつては「半開」「半櫃」とも表記された。韓国独特の櫃で、前面の上半部を扉とし、その扉の下側に蝶番があり、上下に開閉するようになっている家具である。庶民層では「櫥」「籠」(ノン)の代わりに多く使われ、保有量は多く、その形態には地方性がある。

濟州バンダジ：濟州島のような島嶼地方では衣類だけに限らず貴重な文書も保管する必需品で、1戸に1つ以上は保有されていた。上には布団を載せる使い方である。前面に不老草文や広頭釘の装飾金具があるのが特徴である。

平壤バンダジ：他地方のバンダジと比べ、大きく鮎、南大門などの装飾金具がつく。装飾金具は直線的である。

慶尚道バンダジ：最も小型で、金具も小さく、木目が強調された素朴な形態で「慶州バンダジ」ともいう。

京畿バンダジ：比較的小型で、金具も小さく、直線的で清楚な印象を与える。金具は鉄の他白銅黄銅も使用。

全州バンダジ：前面に「燕尾」蝶番をつけ、内面上部に3つの引出しがついている。開城バンダジ、京畿バンダジに近い。平壤バンダジに比べ小振りで、装飾金具も簡素なものである。

江華バンダジ：王室用に製作されたためか、構造が特異で装飾金具の種類も30種以上つけられることがある。

このように多様な中から、かつての舎廊房の「四方卓子」と「文匣」の清楚な雰囲気を中心とすることを目指した。

しかし、この組合せに加え、収納部分をできるだけ多く確保できるように文匣とバンダジを一体化する部分を作ったが、李朝家具には「文匣」とバンダジが一体になるということとは有り得ない。まして、バンダジの上に「冊卓子」が乗るということもあり得ないのである。各部分には李朝様式が採用されているが、全体構成としては、李朝家具の形態要素をかつての居住様式からはぎ取り、

再構成したものである。

2-2 全体のサイズと構成部分の特徴

組み合わせたこの家具の最大寸法はW1800×D400×H1700であるが、李朝家具は現代の収納家具に比べやや小振りなところに特徴があり、これは、特に高さについて留意しなければならない。基本的に床座の生活の中で成立した家具は、人の背の高さを大きく越えるものではなかったからである。

各部分は独立しており、現在の住生活の要求で、この家具の各部分を別の空間でそれぞれ使うことも可能である。

中央部下部のバンダジ+文匣は本来、性格の違う家具であり、それは、前面に使用する樹種の違いによって表現した。

バンダジは門板を蝶番を支点に完全に下に下ろし、ものの出し入れをするものだが、ここでは門板の両端に鎖をステーとして用い、水平で固定されるようにした。こうすることによって、ものの出し入れの際に、水平になった門板の上を使うことができる。バンダジの内部には1枚の可動の棚板を設け、内部の効率的な利用ができるようにした。

中央上部の冊卓子は小冊子などでも立てられるよう主要な構造材とは別に横木を渡した。こうした横木も本来の冊卓子にはないものである。また最上段の背面は住宅の窓戸のイメージを挿入している。

四方卓子部分は下の2層が両開き扉の構成で、本来上部の棚部分は四方にオープンなのであるが、設置される位置の条件から背板を用い、最上段は雷文の透かしとした。

2-3. 使用樹種

文匣+バンダジ部 側、天、底板、前板、門板：カエデ、バンダジ部、文匣部背板・文匣部けんどん蓋：キリ

四方卓子部 柱材・扉框：クルミ、棚板(層板)・扉鏡板・側板・背板・雷文透刻背板：キリ、冊卓子部柱材：クルミ、背板：キリ、前面紙張り組子：ヒノキ

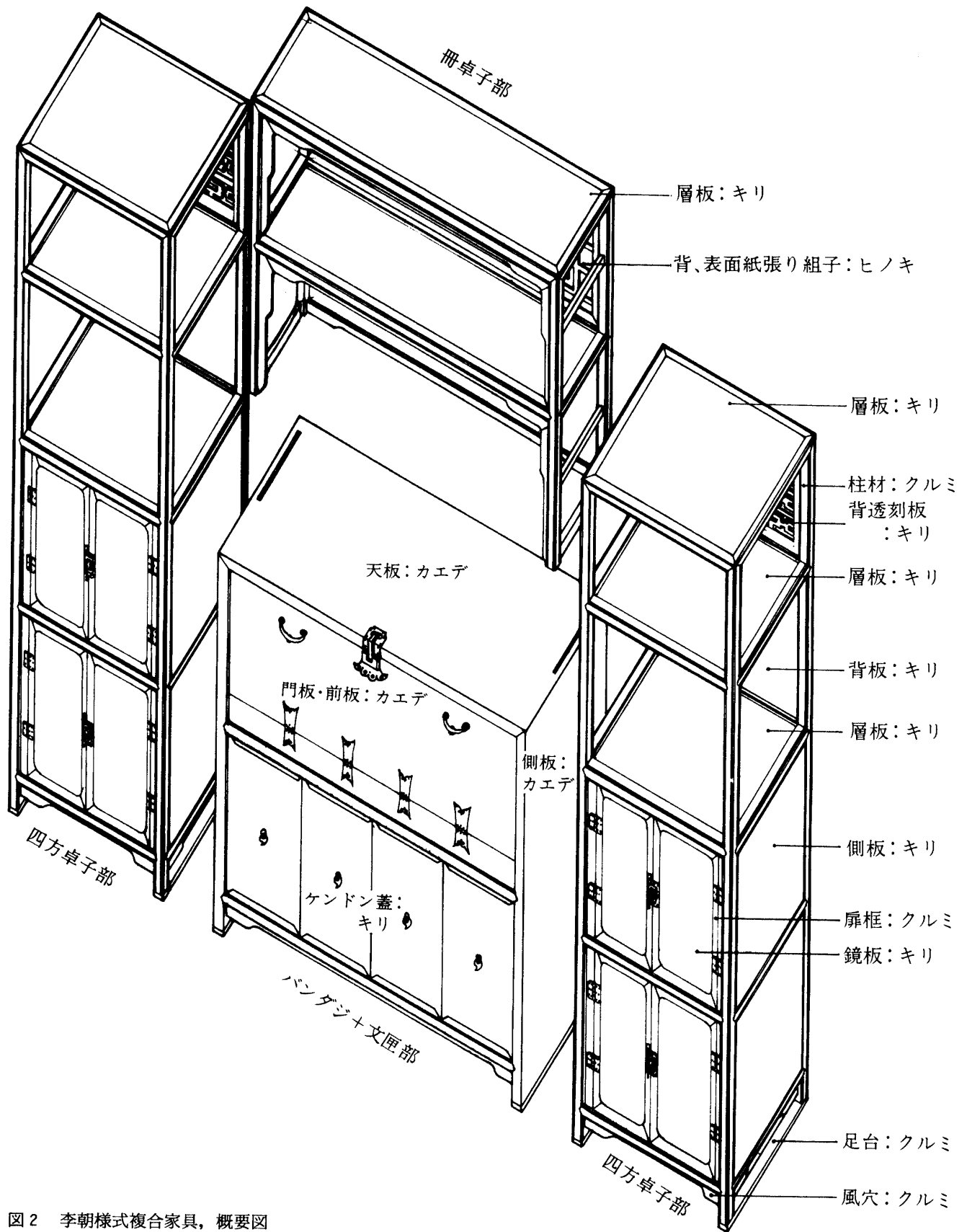


図 2 李朝様式複合家具，概要図

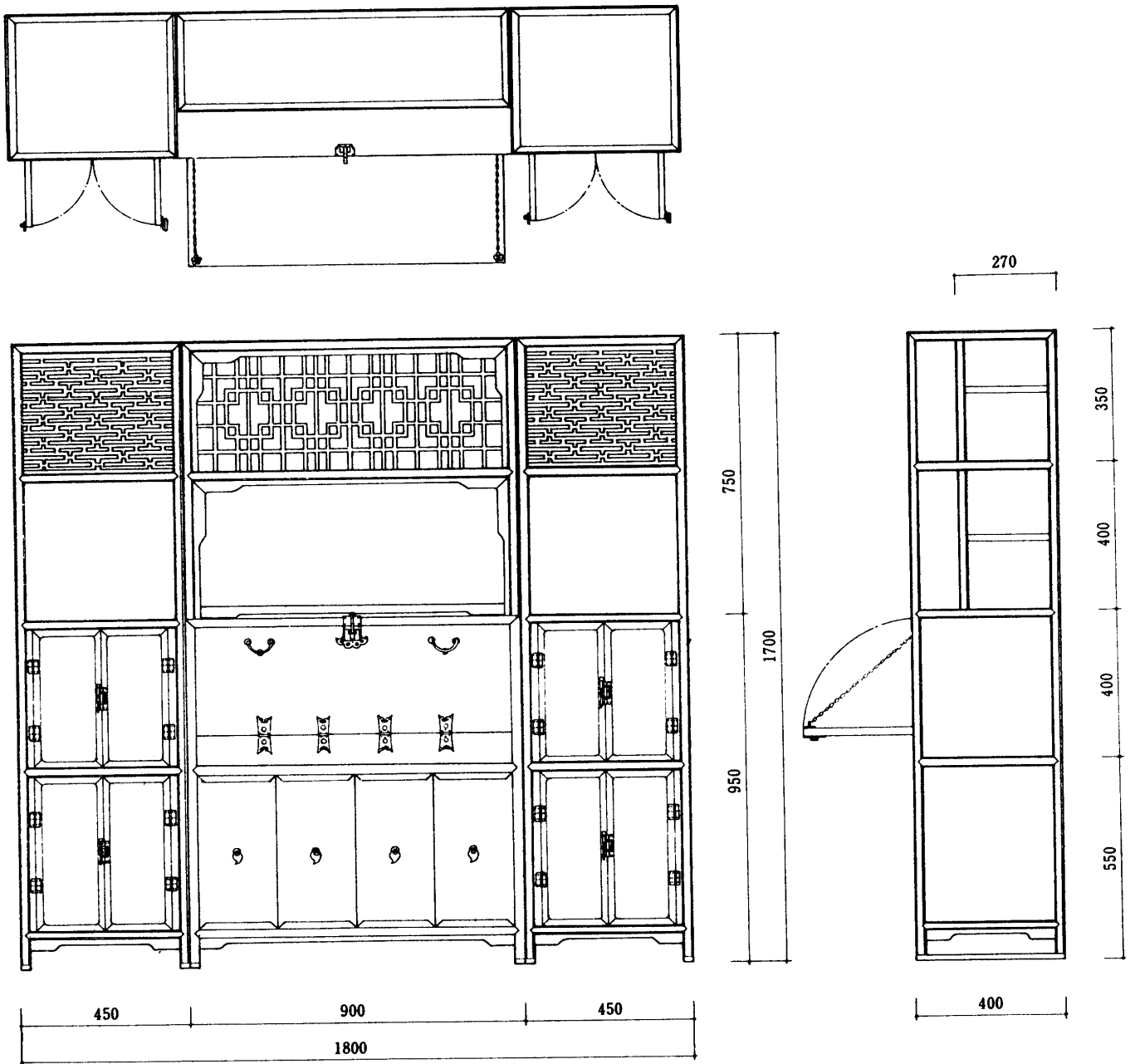


図3 李朝様式複合家具, 3面図 単位:mm

以上のように主として、カエデ、クルミ、キリの3種を使用した。

2-4. 各部接合

木部の製作は大川市のメーカーに依頼し、現在ではその製作が次第に困難となっている伝統的な仕口を多用している。その名称は次の通り。

三方留ツギ、剣留ホゾツギ、上端留ホゾツギ、肩付追入ツギ、追入ツギ、留形隠アリ組ツギ、留

ハシバメ

2-5. 塗装仕上げ

李朝家具では仕上げは漆が用いられたり、エゴマ、キリ等の乾性油が用いられてきたが、この家具では全体の塗装はポリウレタン樹脂塗装とした。キリ部分の着色は水性着色料に重クロム酸カリで着色後、バーナーで表面を焼き、「うずくり」で表面の木目を出し、高明度の砥の粉をかけ、更にブ

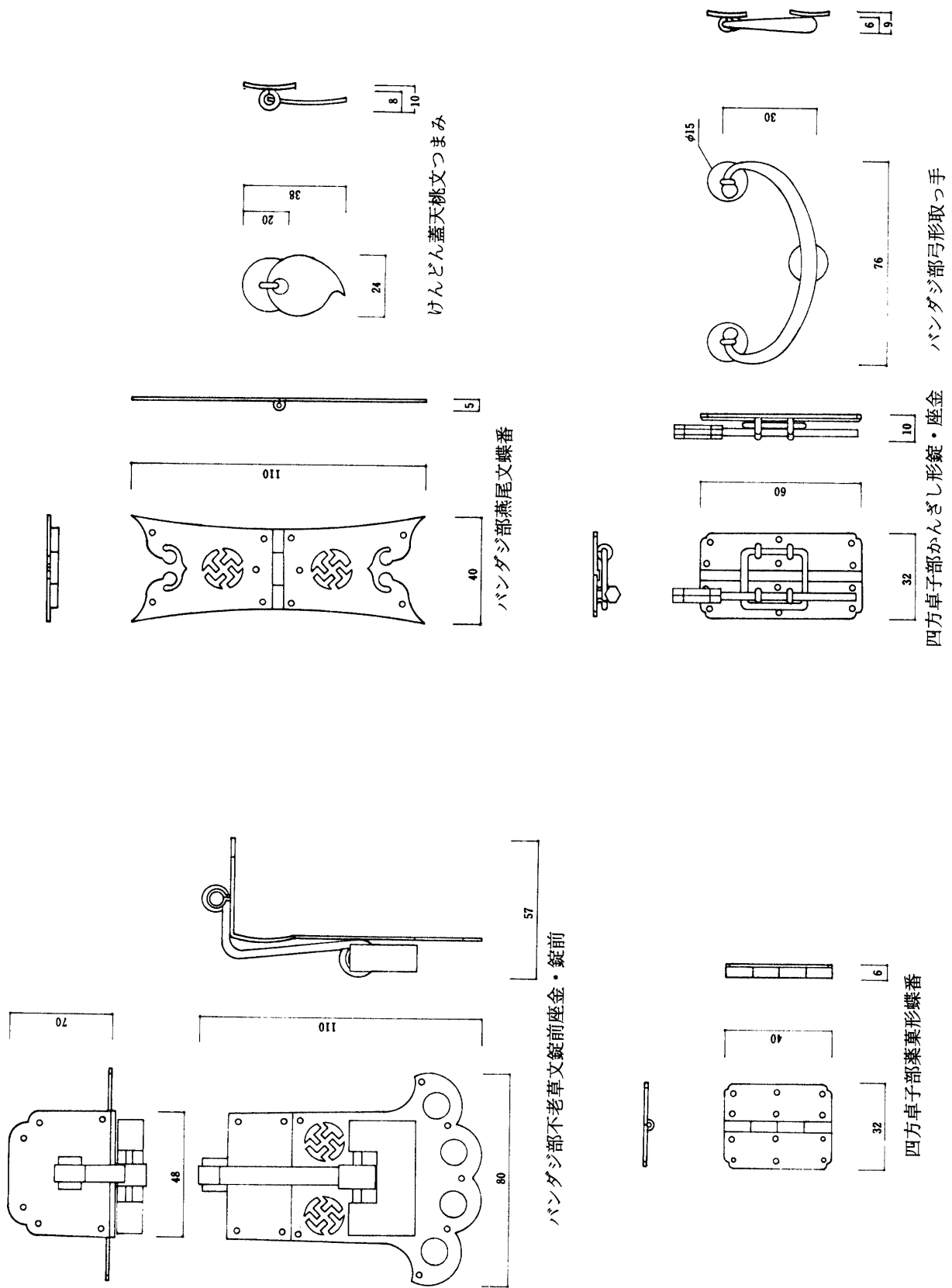


図 4 金具詳細図，単位：mm

ラッシングし、木目を出し、薄くポリウレタン樹脂を塗装。

2-6. 金具

バンダジ部錠前、錠前座金(不老草文)、バンダジ部蝶番(燕尾文)、文匣部けんどん蓋つまみ(天桃文)、薬葉形蝶番、扉用鍛付座金、かんざし錠、弓形取っ手で、厚さ1.2mm~2.0mmの真鍮板を使用。表面は強く金属光沢が出ないように、わずかに肌を荒している。

これらの金具の形態は、それぞれの形の中に不老長生、富貴、子孫繁栄などの願いが込められるものである。伝統的に「十長生」の文様が用いられ、家具が、単に衣類や書類の収納保管という機能だけでなく、装飾文様という具体的な形態を通してそれを使い、所有する人の願いが表現される。

金具の取り付けで技術的に問題だったのは、ビス・ナットや木ネジを使わず、例えば、取っ手を吊りこむ部分の金具は前板の裏で折り返し、板に

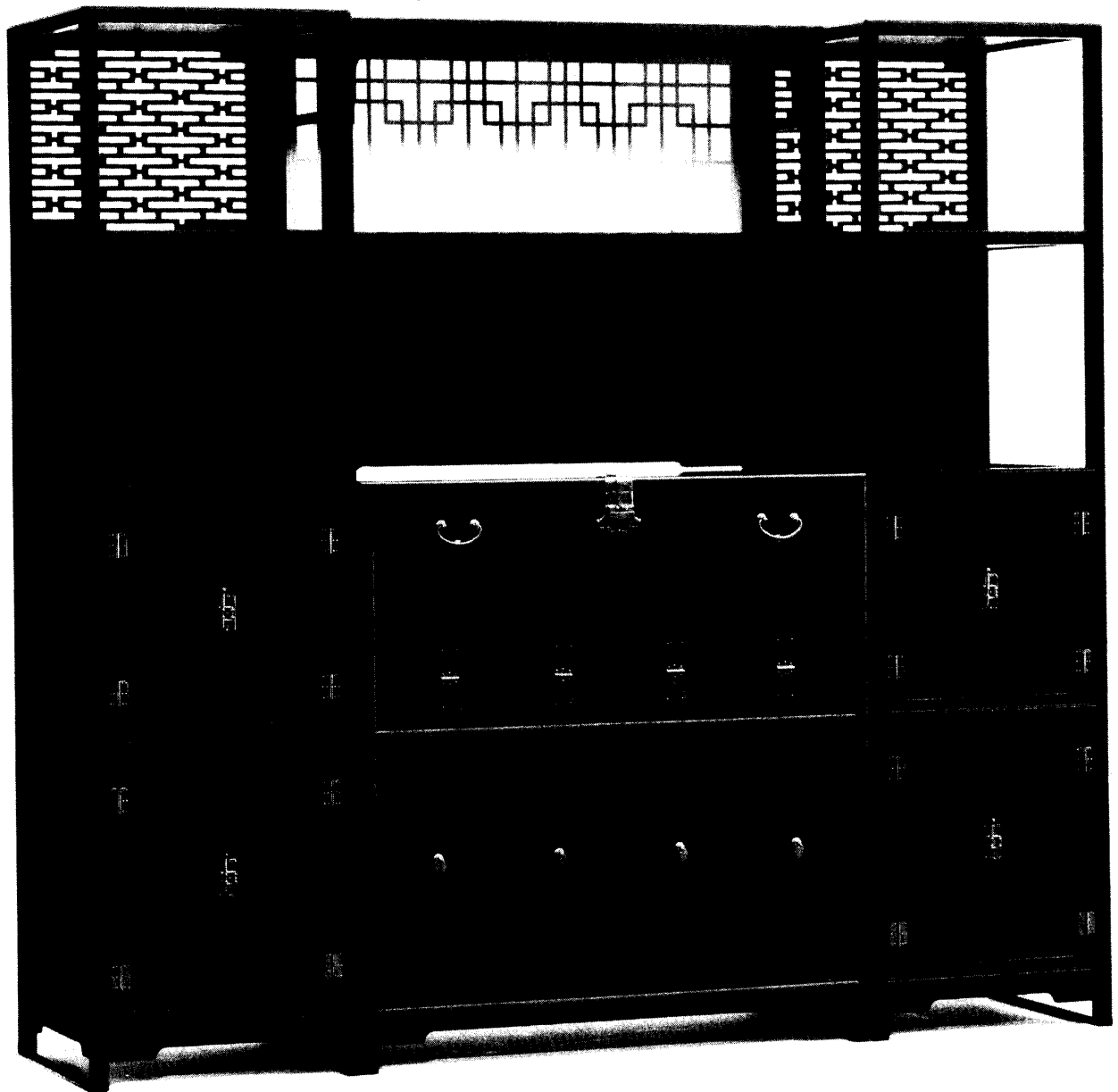


図5 完成した状態

打ち込むというやり方で前板から脱落しないようにすることである。また、蝶番なども釘打ち付け後、先端部を曲げ、木部に食い込ませるというやり方を採らなければならないことであった。

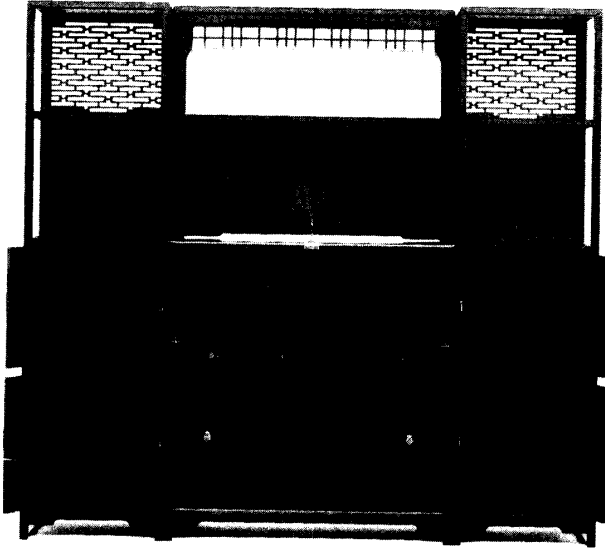


図6 扉を開放した状態

3. おわりに

ある歴史的家具様式を忠実に再現することと、ある様式を基調にしながら現代に適合する家具をデザインすることは基本的な違いがある。

本来、筆者はその技術的な面に於いては再現の形を採りたかったが、完全には実現できなかった。例えば、キリを焼いてうづくりで木目を出すという方法は韓国で「烙法」と呼ばれる。この伝統的な技術がわが国でも琴の製作過程では見ることができるが、家具の産地では薬品処理と併せた方法に変わっている。また、漆を使うことも経済的な面と技術的な面で無理であった。

しかし、木工の伝統的接合法は現在の家具産地

でも可能であり、また、金具の製作は韓国の漆芸作家、金聖洙先生のお世話で満足できるものとなった。

四方卓子部に背板を設け、最上段部の背にも透刻を持った背板をつけたのは、設置される場所の条件があったため、冊卓子部の最上段の背の扱いも同様の理由による。

また、バンダジと文匣を1つの構成部分としたことは李朝家具をかつての空間から切り離し、現代生活の要求にそわせた結果である。従って、正確に李朝様式の家具かと問われれば、すこし違うと答えることになるだろう。日本の現代生活の要求を考慮しつつ、様式的には最大限「李朝」である収納家具兼飾り棚だということになるだろう。家具の複合化は李朝家具の展開の中でも見られることなのだから、ましてや現代、新たな複合形態があってもおかしくはないと考えている。

注

- 1) 拙稿「国立民族学博物館所蔵の韓国の収納家具—その技術とデザイン—」『国立民族学博物館研究報告10巻2号』P 365~426 1985
- 2) 裏満実『李朝木工家具の美』普成文化社 1983
- 3) 朴栄圭『韓国の木家具』三省出版社 1982

付記：この家具デザインの依頼者は、有田の今泉今右衛門氏で、本学非常勤講師那賀清彦先生のご紹介でデザインにとりかかったものである。家具製作は、大川市の(株)肥前屋家具工業である。特に、代表取締役中村餘平氏には、難しい注文に応じていただいた。また金具の製作にあたり、韓国淑明女子大学校美術大学教授で漆芸作家の金聖洙先生にアドバイスをいただいた。なお、墨入れ図版は研究生 平田克二君による。記して、感謝申し上げます次第である。